

てん ちゅう さん めい

天統元年(565)
(北齊時代)



図版④「鄭道昭、鄭述祖の書風比較」

雲峯山全套とされる摩崖刻石の中に、鄭道昭の子供・鄭述祖の書とされるものが数件含まれている。「天柱山銘」は、その中で最も大きい刻石である。中央に「天柱山銘」とある大きな碑額がある(図②)。やや楷書に近いが、横画は水平に、所ごとに篆書の字形を示している。

用筆も楷書的でない。本文は、碑



図版②「天柱山銘・整拓本」

爨宝子碑

天柱山銘(選字)



図版③「爨宝子碑と天柱山銘の比較」

旧い書法様式の刻石⑥

木
雞
伊
藤
滋

木雞
伊藤 滋

額よりも筆勢が明確であり、起筆は楷書的であるが、所どころに隸書の波磔の筆勢を示している。文字の構成は、楷書というよりも隸書に近い。この書風に類似した刻石としては、「爨宝子碑」を挙げる。これが出来ると、起筆、水平な横画、隸書的な波磔、左右の筆の払いなどに「爨宝子碑」と共通した用筆

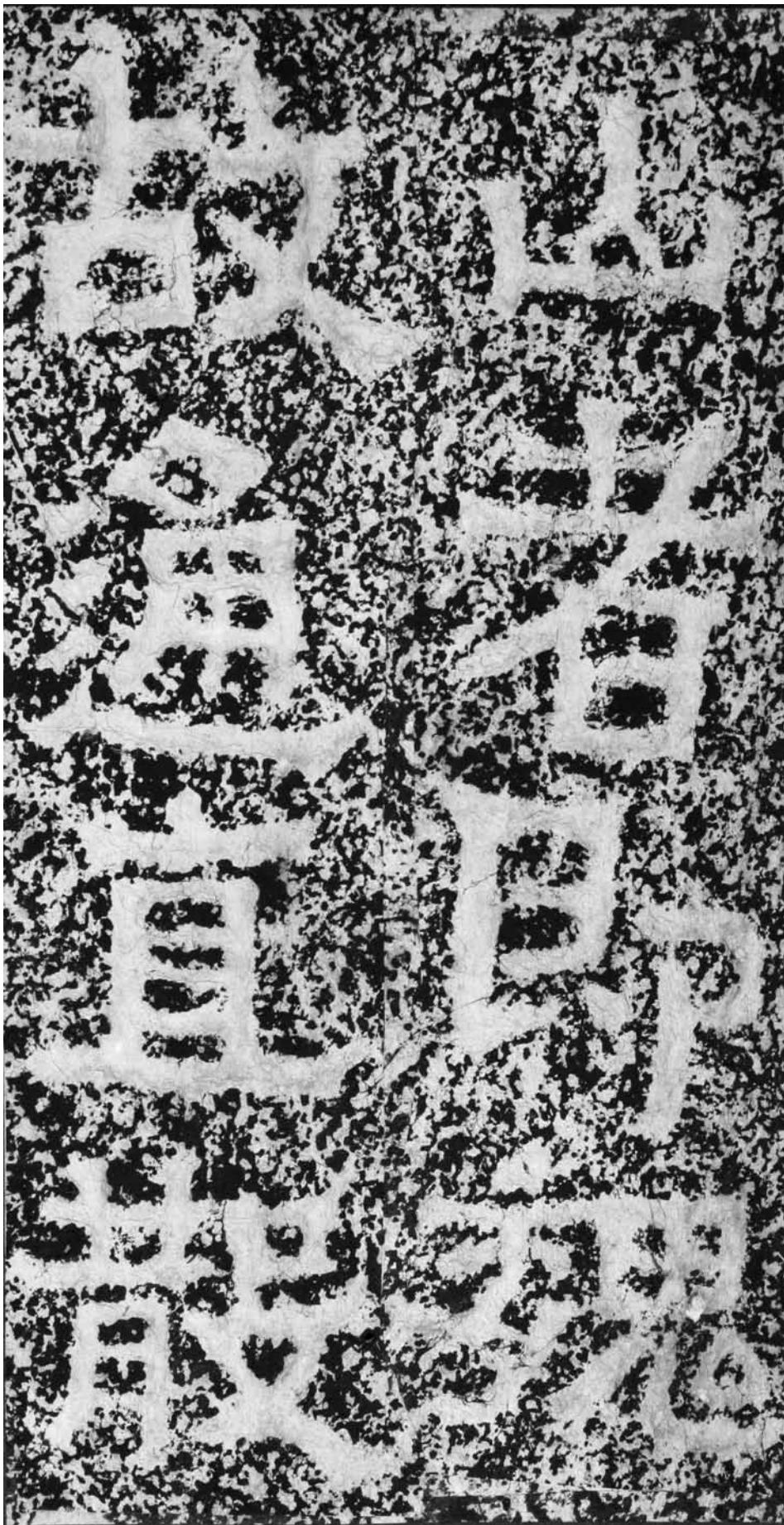
次号は、「修孔子廟碑」です。この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。伊藤滋メールアドレス

mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

を見ることが出来る。しかし、「天柱山銘」は摩崖刻石であり、「爨宝子碑」は、碑刻であり、石面の精粗による文字の印象は大分異なるが、書法の様式は同じであろう(図③)。天柱山銘の筆者・鄭述祖(485~565)は、父・鄭道昭とは異なる書体を用いたのであろうか(図④)。北魏末から碑刻に使用される書体の中に篆書や隸書の書風を取り入れたものを見るようになる。楷書か隸書か区別の難しいものがある。この傾向は、時代が下るに従い次第に多くなる。この流れはある。時代の安定にともない古い時代の伝統的な書法様式が、重要視されたのである。鄭述祖には、「重登雲峯山記」「雲居館山門題字」「夫子廟堂碑」の刻石がある。「天柱山銘」と共に隸書であり、最晩年の書である。

「小繪やや」

①



書道芸術院

平成の群像 (2012)



平川峰子

『私についての日本文化』

今、日本のお家芸だと思っていたものが、そうではなくなってきたと淋しい気持ちになっています。そういう時、「技あり／ニッポンの底力」「世界一支えるニッポンの技術力」などのタイトルを見ると嬉しくなって、ついチャンネルを合わせてしまします。「日本文化」もそうです。少しずつ忘れられている気がします。でも反対に洋風を取

り入れて便利に生活させてもらっていることも現実ですが……。さて、私にとっての日本文化は当然「書」です。さくら祭の会場で私も着物姿で揮毫させていただきとても昂揚した気分を味わいました。日本人で良かったと思う瞬間でした。その気持ちを思い出したくて、今年一月、初参加の現代女流書一〇〇人展・新進作家展（日本橋高島屋）にて着物姿で席上揮毫させていただきました。観てくださった方々は、「書きづらいのになぜ」と思われたでしょうが、私の中では遠い昔の思い出に浸ることができ、日本文化の良さを再認識しました。

「水」は「みつ」、「藤」は「ふち」「荻」は「をき」、「夕べ」は「ゆふべ」などつい、「みす」「ふし」「おき」「ゆうべ」と書いてしまうことを危惧しております。

そして、漢字と変体がなの区別にも気を配らなければいけません。漢字として変体がなと同じ字を使う場合です。どの変体がなをどこに使って作品を仕上げるかは悩みもありますが、日本の歴史と文化に触れているという感じに幸せを感じます。



書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

書道芸術院秋季展・推薦作家展 役員作品巡回東京総局展他開催

10月2日から7日まで東京セントラル美術館、毎日アートサロンにて恒例の秋季展及び推薦作家展が開催され、1日には推薦作家6名の作品を中心に院役員、毎日新聞社・毎日書道会関係のご来賓をお招きして小宴が開催された。

飯田春香代表以下小浜大明、奥田瑞舟、大平邑峰、加藤如石、大町青蓮の各氏が一人5～6畳の壁面に充実意欲作を発表、見応えある展覧となつた。

セントラル会場では財団役員、審査会員選抜作家及び審査会員候補公募入賞、入選作品計170点余の展示となり、漢字から前衛まで多彩な作品群で充実していた。8階の東京銀座画廊美術館では65回記念役員作品巡回東京総局展が、歴代会長作5点、全国巡回の財団役員作品、更に東京総局会員の半紙大を中心とする小品120点余を含め賑やかに展開された。震災復興へのチャリティ販売も行われ意義ある催しとなつた。

更に同会場では香川倫子先生率いる馨香会展と下谷洋子先生の書景会展が開催され、銀座マルサビルは書道芸術院の作品で埋め尽くされた感があつた。



20日発行される。是非ご利用いただきたい。

平成25年干支切手発行

恒例の干支切手が間もなく発行される。本年は本院下谷洋子常務理事が揮毫担当に選抜された。この干支切手は特殊切手として毎日新春展開催と併せ

東京展に続き千葉県成田市の成田山書道美術館にて院南関東総局展が10月18日から24日まで開催された。同館では小暮青風遺作展、千葉県書道協会役員展も開催されており、連日賑わっていた。20日には会場内にて地元千葉県書道協の岩波白鵬会長が「千葉県の書について」、辻元大雲が「書道芸術院の書」についてと題し講演、夕刻には会場を市内ホテルに移し祝賀懇親会が盛大に催された。

10月2日から7日まで東京セントラル美術館、毎日アートサロンにて恒例の秋季展及び推薦作家展が開催され、1日には推薦作家6名の作品を中心に院役員、毎日新聞社・毎日書道会関係のご来賓をお招きして小宴が開催された。

飯田春香代表以下小浜大明、奥田瑞舟、大平邑峰、加藤如石、大町青蓮の各氏が一人5～6畳の壁面に充実意欲作を発表、見応えある展覧となつた。

セントラル会場では財団役員、審査会員選抜作家及び審査会員候補公募入賞、入選作品計170点余の展示となり、漢字から前衛まで多彩な作品群で充実していた。8階の東京銀座画廊美術館では65回記念役員作品巡回東京総局展が、歴代会長作5点、全国巡回の財団役員作品、更に東京総局会員の半紙大を中心とする小品120点余を含め賑やかに展開された。震災復興へのチャリティ販売も行われ意義ある催しとなつた。

更に同会場では香川倫子先生率いる馨香会展と下谷洋子先生の書景会展が開催され、銀座マルサビルは書道芸術院の作品で埋め尽くされた感があつた。

例年大人気で全国の郵便局にて11月20日発行される。是非ご利用いただきたい。

お詫び 名簿中に漢字部・常任幹事の有野玲扇さんが記載漏れとなつておりました。誠に申し訳ありません。

本号53ページの院報に記載いたしましたので名簿への追加記載をお願いいたします。

毎日新聞社・N.H.K.などが東博と主催して開催される。王羲之の国宝「孔侍中帖」はじめ「行穰帖」「喪乱帖」など国宝級の一級文物が展示される。

予告 特別展「書聖 王羲之」

東京国立博物館平成館にて

*会期 25年1月22日～3月3日
*観覧料 一般1500円（前売り1300円）
*毎日書道会特別価格

一般110円、ベアチケット200円

所定の申込書をFAXにて（院事務

所または毎日書道会に申込書を請求してください）

2日にはセントラル会場にてご来賓多数をお招きして祝賀懇親会が開催され、毎日新聞社堀内宏明氏、毎日書道会常任顧問の貞少登先生のご祝辞をいただき、毎日書道会糸賀靖夫専務理事のご発声で乾杯、歓談を尽くした。

第66回書道芸術院展出品要項発行 併せて平成24年度会員名簿も

今回展から3年ぶりの東京都美術館を会場として開催されるため作品募集日程などが大幅に変更になつてるのでご注意願いたい。

中国王朝の至宝展開催

東京国立博物館平成館にて特別展として開催中。今回の特色は夏から宋代に至る中国歴代の王朝の都・中心地域に焦点を当て、それぞれの地域の特質が凝縮された代表的な文物を比較しながら展示するという新しい手法によって、多元的でダイナミックに展開してきた中国文化の核心に迫ることにある。たとえば蜀と夏・殷・楚と齊・魯・秦と漢といった二つの王朝を対比して、展示物により具体的に理解しやすい構成になっている。是非ご高覧を。

*会期 10月10日～12月24日

月曜休館、金曜日は20：00まで開館

*観覧料 一般1500円（前売り1300円）

漢字(二)

石田春窓

かな(二)

平川峰子

今回の作品は「応」です。

平成17年連立個展の作品です。

白川静先生は、金文の「応」について次の様に説明しています。

「応」は「神聖な場所に「隹」が現われている形。鳥が、神靈な使者であり神靈の化身とされたという古代の信仰が、このような字を生んだのである



平成17年連立個展「応」

石田春窓書

21世紀の書

—私の主張—



西本願寺本三十六人家集〈平安〉能宣集・上

う」(白川静著、漢字類編より)
青銅器に鋳込まれた金文の文字を筆で
書に表現するのは、むつかしい事で

す。白川先生の説明を読んで、鳥がはばたく様子を連想し、線を強く、力はない様、のびのびと楽しく書きました。

「かな」は難しい。変体がながわからないと読めないとよく言われます。
しかし、例えば、「西本願寺本三十六人家集」を見れば読めなくて

も「綺麗!」と思わず感嘆の声を発します。それが第一歩でいいと思います。かなの古筆は文字よりも先に料紙の美しさに目がいってしまうのです。西本願寺本三十六人家集は三十六人の歌が各人別に収録されていて縦約20センチ、横約16センチの美しいあやかな料紙に玲瓏と書

き写されています。その料紙の豪華さ、密度の高い技法は驚くばかりで、破りつぎ・切りつき・切り箔、抽象的に描かれた浮雲・流れる水の紋様、具象的な鳥・蝶などの優雅で王朝的なデザインがすばらしく美しいのです。そしてそれからかな特有の連綿の風雅な線の美しさに惹かれていきます。その後です。読むことを忘れてしまっていることに気付かされ、どんなことが書いてあるのかと内容が気になり、変体がなまるで魔法をかけられたみたいになります。

特集：書道芸術院秋季展

書道芸術院秋季展

審査会員選抜作品
審査会員候補公募作品

会期 平成24年10月2日(火)～10月7日(日)
会場 東京セントラル美術館

アートサロン毎日(推薦作家展会場・毎日新聞社内)

秋季展実行委員長

後藤 大峰

研究会では実行委員の山口仙草先生の進行により進められた。

初秋の風が心地よい季節、恒例の「書道芸術院秋季展」が本年も銀座セントラル美術館にて開催された。

今回展は例年の財団役員、審査会員選抜、過年度峰雲賞受賞者の各先生方と審査会員候補の公募による入賞、入选作品に加え、昨年より始まった「推薦作家展」が今回も毎日アートサロンで開催された。

推薦作家の選抜の内訳は、第65回書道芸術院展にて全五部門中、峰雲賞受賞最終選考に残った、候補者6人を指す。

10月2日には表彰式・研究会が開かれ、推薦作家の紹介・秋季菊花賞の表彰・入選者への賞状授与が行われた。

括弧を述べていただき終了した。

その後、ご来賓をお招きし、恒例のレセプションを行って初日を終えた。



秋季展会場入り口



大盛況の推薦作家展

書道芸術院秋季展〈審査会員候補公募状況〉

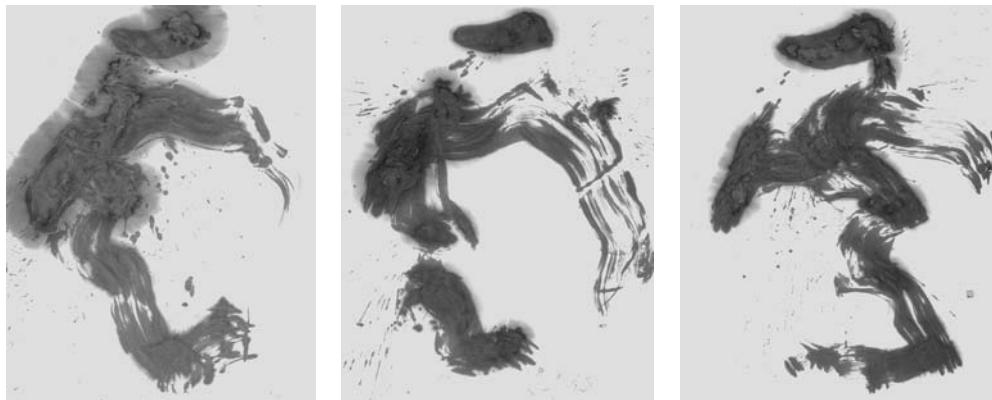
部	出品点数	出品人数	秋季菊花賞	入選	落選
漢字	155	97	4	18	75
かな	12	11	1	2	8
現代詩文書	98	59	3	11	45
前衛	95	48	2	9	37
篆刻・刻字	2	2	0	1	1
計	362	217	10	41	166



表彰式で理事長あいさつ

〈併催〉 推 薦 作 家 展

《飯 田 春 香》



〈雲 3 題〉

135×105cm×3

《小 浜 大 明》



〈蒼龍〉

175×450cm

《大 平 邑 峰》



〈拔錨〉

135×280cm

《加 藤 如 石》



〈寒山拾得〉

70×120cm

《奥 田 瑞 舟》



〈古今和歌集より 秋〉

68×179cm 全体



部分

《大 町 青 蓮》



〈流星〉

143×106cm

書道芸術院役員作品

〈蘿
よみがえる〉



会長・名誉会員 恩地春洋 97×117cm

〈幼兒も〉



理事長・常任総務 辻元大雲 72×150cm

〈脱〉



常務理事・常任総務 大野祥雲 90×120cm

〈もがり笛〉



常務理事・常任総務 小竹石雲

〈月〉



理事・常任総務 下谷洋子 70×120cm

〈晩夏の海〉



常任総務 尾形澄神 70×138cm

〈華(け)〉



常任総務 新井京華

136×70cm

〈曲〉



常任総務 川島舟錦 90×120cm

〈青簡〉



常任総務 濱田尚川

170×62cm

〈「希望」〉



常任総務 平岡千香子 70×152cm

〈明歴々〉



常任総務 石田和子 73×152cm

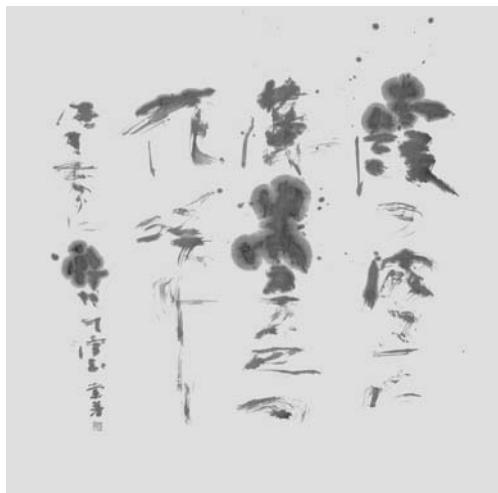
〈ちょうせん〉



常任総務 大井美津江

180×53cm

〈薄墨桜〉



常任総務 上村棠芳

〈スター・バースト〉



常任総務 工藤永翠

182×60cm

〈野分〉



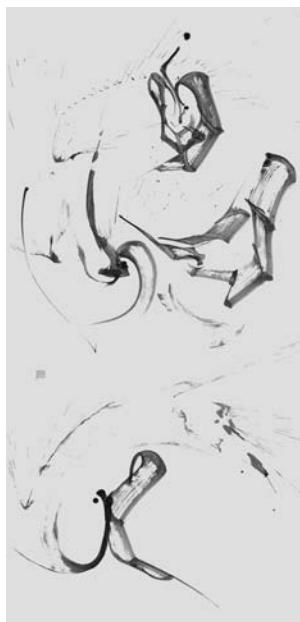
常任総務 大辻多希子 53×175cm

〈SIN望〉



常任総務 太田蓮紅 91×121cm

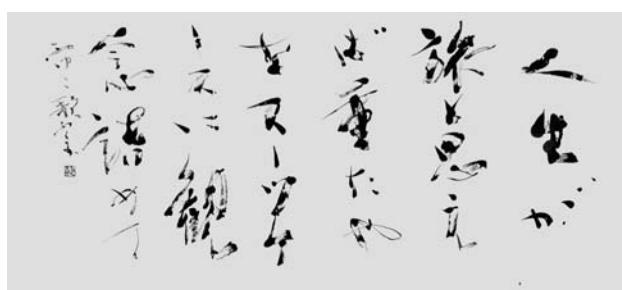
〈遣による〉



常任総務 倉林紅瑠

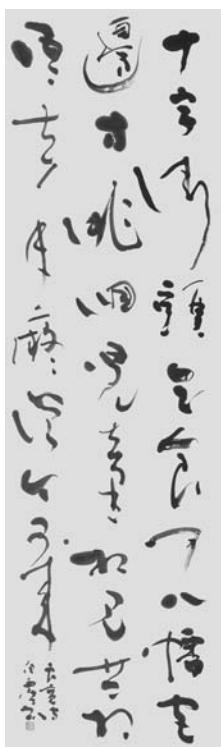
152×73cm

〈ふゆい歌〉



常任総務 佐久間 ふく子 68×148cm

〈良賀詩〉



常任総務 島田白露

〈無我夢中〉



常任総務 佐藤菜扇 55×156cm

176×55cm

〈春宿左省〉



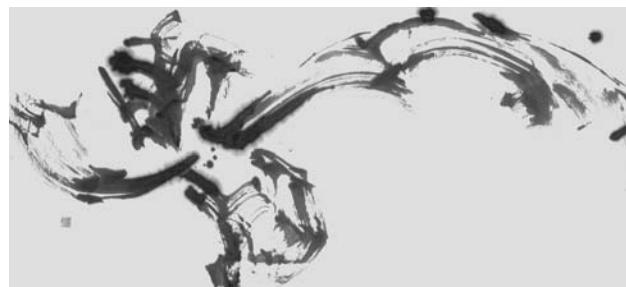
165×53cm

〈斑鳩〉



常任総務 白石和楓 55×175cm

〈裏〉



常任総務 知野洛水 73×152cm

常任総務
高田春来

〈烈〉



常任総務 依岡紫峰 90×120cm

〈里の朝〉



120×90cm

〈七言二句〉



常任総務 半田藤扇 60×180cm

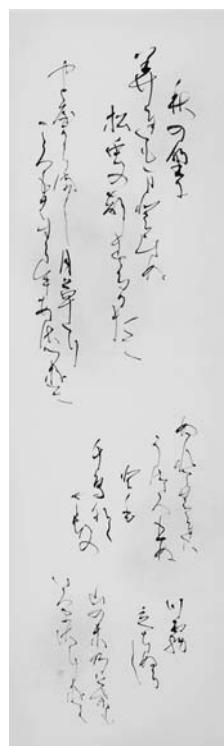
特集：書道芸術院秋季展

〈諷誦文〉



常任総務 目良泰幽 53×175cm

〈秋の野〉



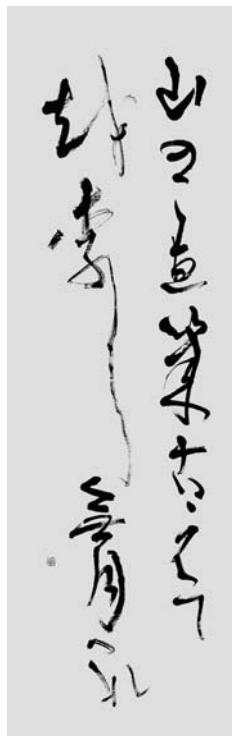
175×53cm

〈爽〉



120×90cm

常任総務 善養寺紅風



常任総務 前田まさ美

180×53cm

〈明滅〉



常任総務 真下京子

112×82cm

〈鷹羽狩行句〉



常任総務 広瀬舟雲 70×138cm

秋季菊賞審査会員候補

〈客観〉



伊藤芳蘭

175×53cm

〈窓〉



朝倉希代子

121×91cm

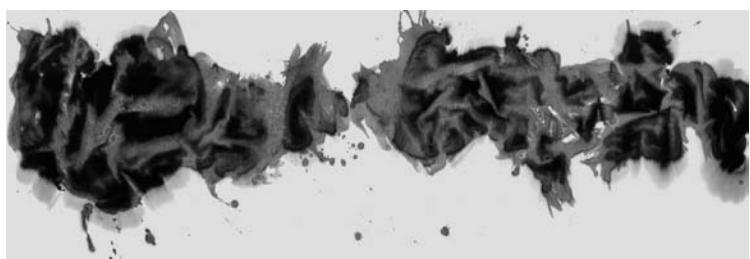
〈北原白秋の詩〉



岡崎翠園

182×61cm

〈雲海〉



野口加奈 61×177cm

〈ありがとうの行き先〉



佐藤初香 60×181cm

秋季菊花賞

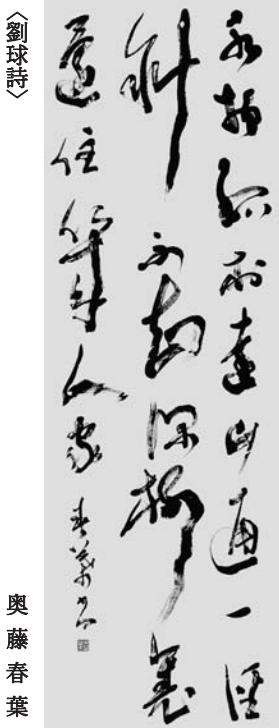
審査会員候補

史々



田子恵琉

152×70cm



〈劉球詩〉

奥藤春葉

165×53cm

激石の句



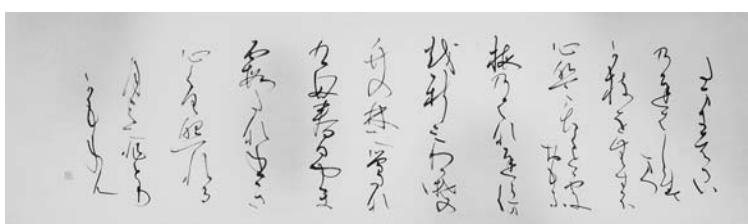
水野大祐 69.5×147cm

祝顕詩



佐藤桂香

たまき春



星野栄子 53×178cm

175×55cm

書道芸術院創立65周年記念

併催 玄遠社(関西支局)展

会期 平成24年9月4日(火)～9日(日)
会場 大阪市立美術館

実行委員長（関西支局長）

小林琴水

今日は盛りだくさんの書展となり、

書道芸術院創立65周年記念役員作品巡回展・玄遠社公募作品（一般・学生）・

玄遠社役員作品・玄遠社役員大作6名（小林琴水・小伏小扇・飯田春香・高

田春来・水野春翠・有野玲扇）・日韓書芸二人展（林 炳圻・恩地春洋）・

日韓交流書芸代表作品（韓国側33点、日本側32点）。一室の入った中央に巡回展の作品です。各会場を廻っていましたが、「会場によって全く作品が違つて見える」と、巡回展を各総局、支局で見てこられた方は皆さんそうおっしゃっていました。間隔・天井の高さ・明るさによって違うのでしょうか。巡回展コーナーはすつきりとして素晴らしいと評されました。右側には、6点の大作、歴代会長作品、玄遠社物故者作品、つづいて、二人展の大作には圧倒され林先生は、

文化院長



玄遠社展



ハン글文字6曲2双の超大作・他17点。恩地先生は大作他15点両先生の作品群の素晴しさに感銘を受けた。一室の出口の壁面には韓国側作品がずらりと並べられた。二室は玄遠社公募作品、指導者作品、全日本学校書道連盟入賞

作品が展示、全体を見て今まで一番スッキリと素晴らしい展覧会となつた様に思いました。最終日、9日(日)は天王寺都ホテルに於て表彰式、並びに講演会、林 炳圻先生の、演題「ハン글について」の講演一時間、つづいて巡



訪韓団の皆さんと



大作のコーナー

回展、二人展の祝賀懇親会が盛大に行われた。150名の参加でした。ご来賓の前ウクライナ大使、天江喜七郎様のごあいさつに始まって、毎日書道展名譽会員永嶋山耀様、毎日新聞大阪本社総合事業局長、水置恒夫様などに激励のお言葉を頂き、なごやかな宴となり、アツという間に二時間がたち、太源書道会の北野根山様による一本締めで、またまた盛り上がり、閉会のことばを、砂本杏花、書道芸術院理事によって、バッヂリと閉めて頂き、ご来賓の方々を拍手でお見送りして無事、終了いたしました。

最後になりましたが、大阪では仲々広くて、天井の高い会場がないので、この様な型でしか展示出来ないのですが今回はすごく好評で、入場者数も大変多く、これもひとえに、役員作品巡回展のお蔭と深く感謝申しあげます。



物故者作品 左から 小島・川崎・山下・中西



会場風景



会場風景



日韓展 (日本側)



恩地会長のコーナー



巡回展作品

特別研究部臨書課題

（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

用紙 半紙普通判
左の法帖の中から
何文字臨書してもよい。
(掲載部分以外は不可)

（解説）
孟法師碑の線は深みがあり、みずみずしく、
きめ細やかで、しなやかである。しつとりと
した木肌を鋭利な刃物でサックリと切りこん
だような味がある。起筆の角度や送筆での筆

圧の加減を微妙に変えてあり、技法を極限ま
で単純化した歐・虞よりはずいぶん複雑な表
情をみせている。

字形はほぼ正方形にまとめ、重心を低く構
えるのが基調になっている。

（編集部）

若廻岱山龍駕傳神
丹之祕決秦都鳳祠
流洞簫之妙響用能
延頽年於昧谷振朽

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
(押印のみ也可)



毎日展公募サイズ以内・縦横自由
左記の掲載以外も可

注：かな研究部競書作品は、左の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）

落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

用紙は半紙普通判（料紙可）
（たて長に使用）

別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は、半紙サイズに切って使用のこと。

へよみ

〈解説〉

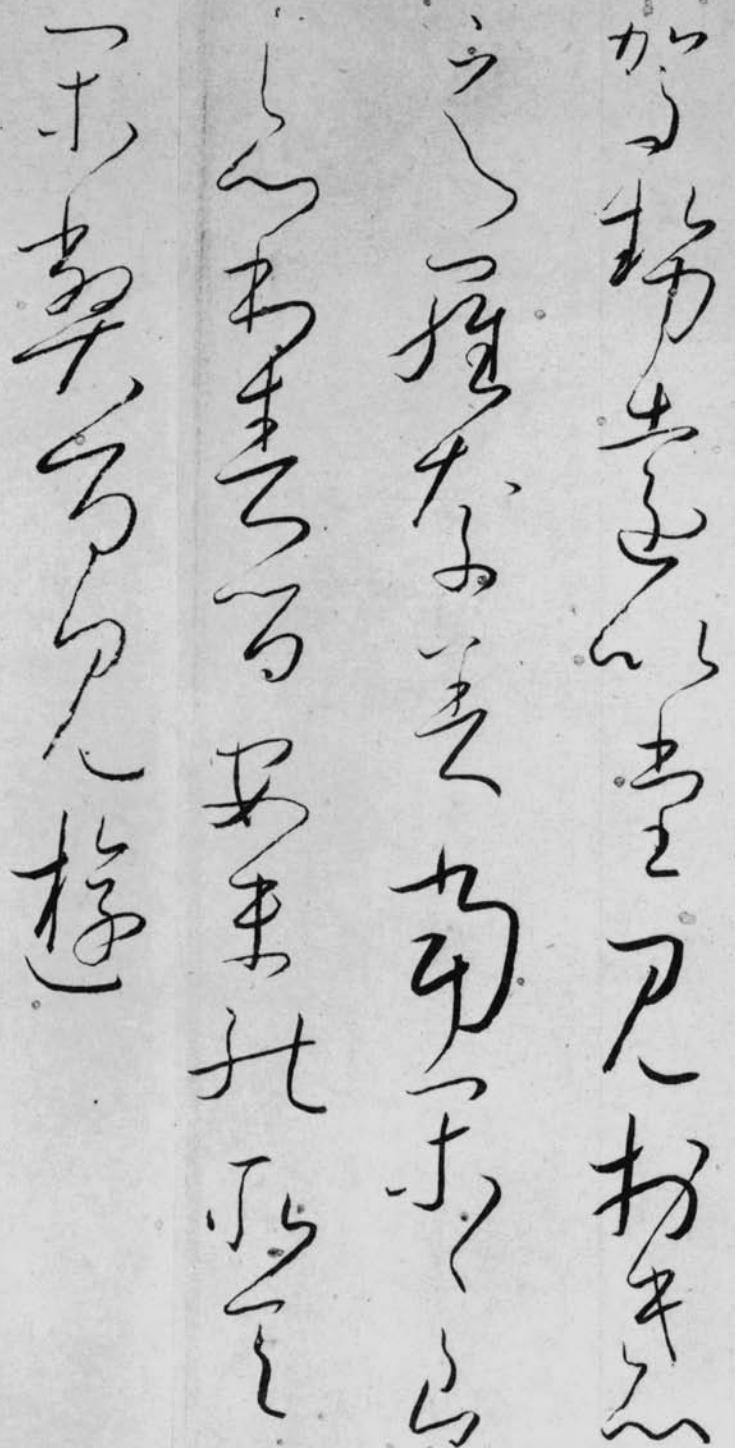
中国の文字である漢字が日本に渡来して、やがて日本的な仮名に（男手から女手）移行してゆく途中の草仮名という字体で書かれた数少ない名品の一つである。

今回の歌を含め、第二紙以下は、第一紙に比べて文字も大きく、緩急抑揚の変化が大きい。また、始筆・終筆を含めて筆法が異なっており、側筆も多見られるため、両紙は別人の筆者と思われる。

文字は、一字一字が比較的完成された字形で独立し、女手にみられるような形のデフォルメによる連綿はほとんど見られない。

（編集部）

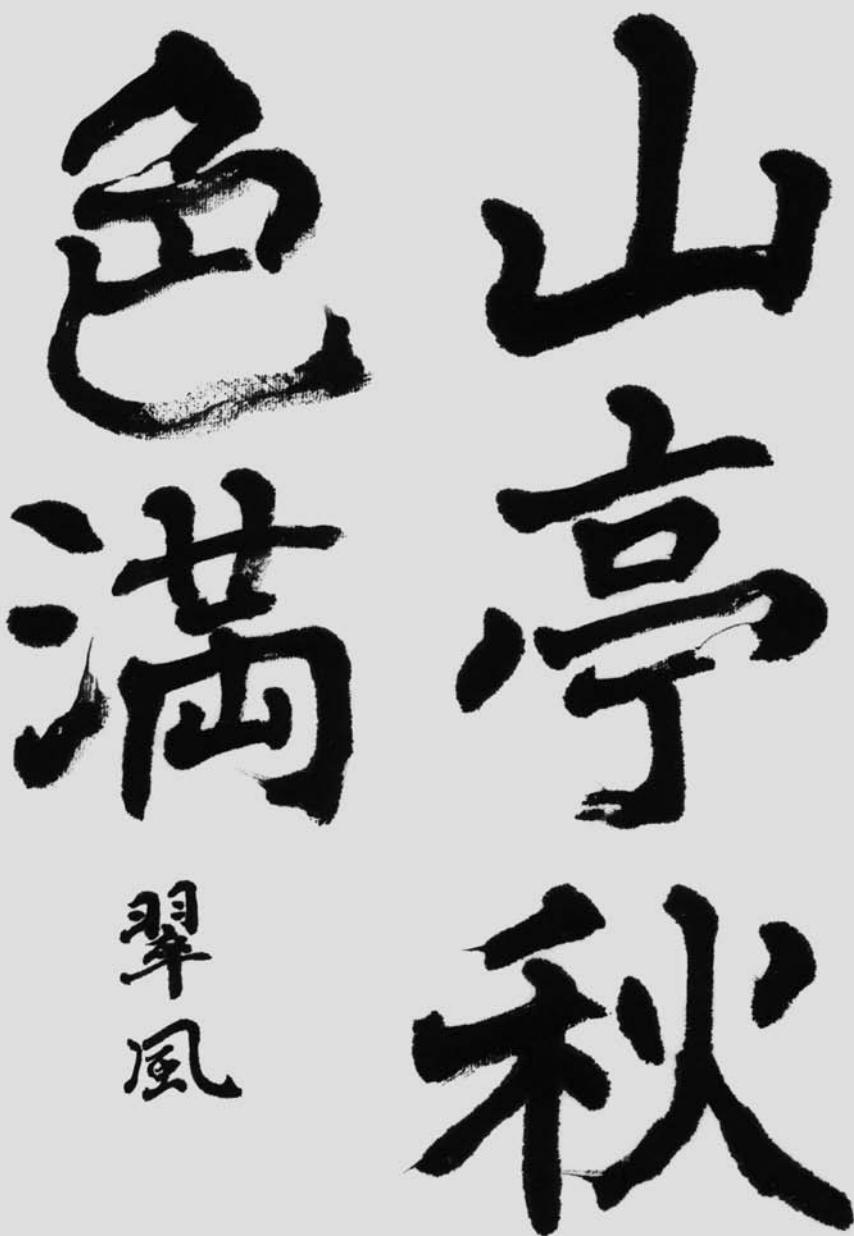
る。



(93%縮小)

最首翠風

山亭秋色満
(山亭に秋色満つ)



書体=自由

楷書体は読み易いという利点があります。が、篆書や草書のように書体そのものの持つ造形美に乏しいので創作では敬遠されがちです。一般の観賞者から遊離し過ぎない為にも楷書体は見直されるべきかもしれません。

ただ、楷書体を素材にいかに芸術作品として見せるかは大変難しい課題です。書美の根本である線質の美に頼らなくては俗書になる恐れがあるからです。

参考作品は鄭道昭の摩崖碑を思いながら語句のイメージを表現。鄭碑の書は読み易く味わい深いので雑誌の題字にも多く使われています。月刊「書道」(五禾書房)「書壇」「書屋」などなど。

この欄は書体自由です。大いに創作を楽しんでください。

習い方解説(二)

小浜大明

清霜染樹
(清霜樹を染む)

前回は「顏真卿」の書風を参考にしましたが、今回は「歐陽詢」の書風を参考に書いてみました。

四文字とも比較的画数が多い為、ややもすると文字が大きくなりがちなので注意しましょう。

「清」三水の間隔は上が狭く、下が広くなるよう表現します。

「青」の字の横画の間隔が均分されるよう注意して下さい。

「霜」雨冠は横に広く書き、下部の相を包み込むように。

「染」三水が並ぶので、変化をつけましょう。

「樹」横広になりやすいので、引き締めるよう配慮します。



清霜染樹 よみ(せいしゆじゆを染む)

書体=楷書

かな規定 初段以上【十二月十日締めきり】用紙 半紙普通判(料紙可)

石井明子選書

習い方解説(二)

石井明子

白菊に赤みさしけり霜の朝
(松岡青蘿)

あくよみに
けり

雨の朝
青蘿句

よみ方 白菊にあか(可)み(美)さしけり(利)霜の朝 青蘿句

創作

「青山杉雨の眼と書」展を拝見し、高弟の講演を聞く機会を得ました。作品群とコレクションには圧倒される思いでしたが、「書道グラフ」編集に傾けた情熱について語られた中で、どれほどみると大切にされたかを知ることができ感銘を受けました。

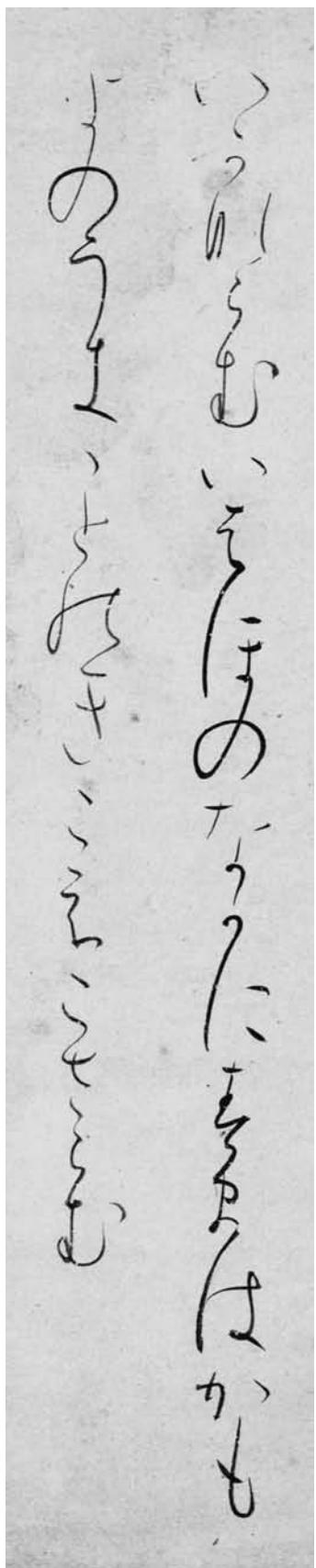
古筆を学ぶとき、いきなり筆をとらないで、三日三晩全体を眺めてから、書き始めるよう指導される先生があります。せめて、見る、観る、観るの姿勢で向きあいたいものです。その中から、少しずつ、一人ずつの美意識が育っていくのではないでしょうか。

俳句という簡潔な短詩の魔力に打ちのめされながら書きました。暴走せず、萎縮せずの程よいバランスを探っていきましょう。

かな規定 秀級以下【十二月十日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切 第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 いか(可)な(那)らむいは(惹)ほのなか(印)にす(春)まばかも

よのうき(支)ことの(能)あいえこおらむ

かな条幅規定【十二月十日締めきり】用紙 小画仙紙半切(料紙可)

天海矩子選書

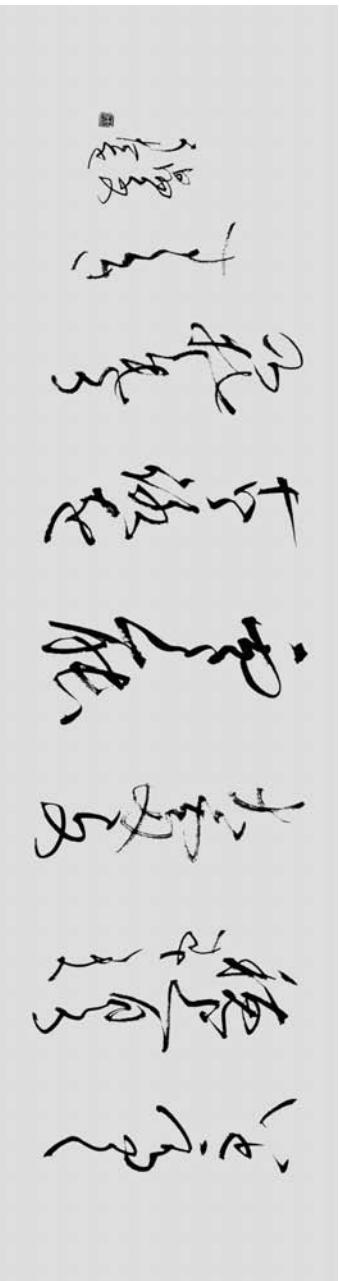
習い方解説 (二)

いと高く(久)穂上ぐ(具)るす(春)す(ノ)き(支)大ぞ(處)ら
の雲の心を眼けるすすき

(伊謝野晶子)

横形式一首は、基本的には七行が適当です。一行の文字数が少ないので、連綿、疎密など変体がなを用いて流れを出しました。墨汁は使わず透明感のある墨色を心掛けましょう。

*よじ形式に限る



よみ方

いと高く(久)穂上ぐ(具)るす(春)す(ノ)き(支)大ぞ(處)ら
の雲の(能)こ(古)こ(ハ)ひ(路)をの(乃)ぞ(楚)け(遣)るすす(ノ)き

晶子のうたを

創作

出品券
貼付位置

漢字条幅規定 初段以上【十二月十日締めきり】

用紙 小画仙紙半切

辻元大雲選書

習い方解説 (二)

辻元大雲

24

霜天欲雨鳴雁去秋
風未落河漢搖大雲書

霜天欲雨鳴雁去秋
(霜天雨ふらんと欲して鳴雁去り、秋風未だ落ちずして河漢搖く。)

(李孝光)

書体=自由



漢字条幅規定 秀級以下【十二月十日締めきり】用紙 小画仙紙半切

小伏小扇選書

習い方解説 (二)

小伏小扇

涼夜の月はあくまで澄みわたつて
いるという高適の句です。
筆は兼毫筆を使用しました。文
中に「さんずい」のある字が二字
ありますが、「さんずい」が同形
にならないよう配慮してください。
日常の鍛練の古法帖から美しい形
など記憶をたよりにあれこれ書き
くらべてみてください。

(高適)

書体=自由

秋の夜の情景を詠んだ句です。
「河漢」は天の川のこと。

前回の楷書から今回は行書單体
表現を参考例とします。おだやか
な王羲之の蘭亭序の風を念頭にお
いてみました。筆はやや柔らかい
羊毫中鋒筆あたりがよいでしょう。
ここに潤渴の変化、太細の変化な
ど、運筆のリズムを加えて楽しく
取り組んでみて下さい。

習い方解説 (二)

千葉蒼玄

国境の長いトンネルを抜けると
雪国であつた。夜の底が白くなつた。
信号所に汽車が止まつた。

向側の座席から娘が立つて来て、
島村の前のがラス窓を落した。雪の
冷気が流れこんだ。

川端康成 雪国より 蒼玄書

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

※落款を必ず入れる。
(自分の名前を入れること)

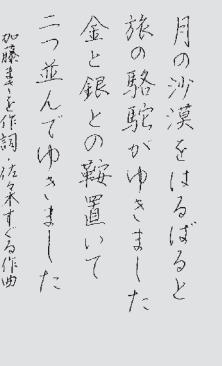
今月も日本文学の名著を取り上げて
みた。川端康成の「雪国」である。
おくのはそ道、雪国は日本人なら誰
でもが冒頭の文章は頭に浮かぶものだ
ろう。近頃、童謡が学校で取り上げら
れなくなつたと聞く。東日本大震災の
時、歌は被災者に勇気を与えてくれた。
人々が共通で歌えるもの共通に思い起
こせるものが民族のつながりになつて
くるものなのだろう。

ペン字は書くペンの素材により雰囲
気が異なつてくる。私の場合は太めの
万年筆を使った、昔と違いパソコンが
普及した今は、文字を書く機会も半減
したが、筆と同じように自分に合った
ペンを選ぶことも重要なこと。

今月の

ホープ作品
各部総評

No. 617



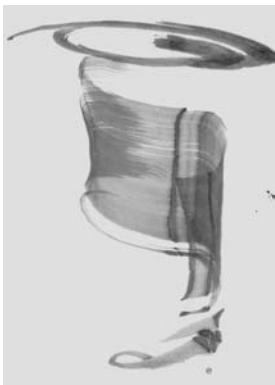
ペン字部 師範 後藤 良泉
漢字とかなとの調和と確かな筆致
が落款まで行き届き統一感と安定
感が醸し出された品格の高い秀作。

◎ペン字部總評 テーマを口ずさ
みながら自然で、温かくまとめ
られた作品が多く良かった。今後
益々のご精進を期待。(和楓評)

参考手本に忠実に丁寧に仕上げ、
リズムも滑らか。文字の広狭や線
の長短、伸縮と見事に捉えて敬服。
◎かな条幅部 総評 作者名や名前
書くのではなく、本文に寄り添う
ようにまとめたい。(洋子評)



漢字条幅部 師範 山崎 翠光
潤渴をバランスよく加えた血の
通った木簡風作品。線が明るく簡
牘の学習の足跡が感じられる。



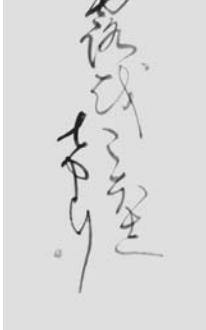
◎前衛書部 総評 創意工夫された
明るい意欲的な作が多く見られ、
うれしいかぎりである。(蓮紅評)



前衛書部 特選 角田 悠香

造形の単純化、墨色による線の
立体感と余白の美しさが一体化し
た作である。

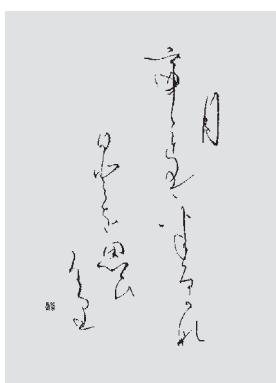
◎前衛書部總評 高鍊度の作
が多い意欲的な作が多く見られ、
うれしいかぎりである。(蓮紅評)



現代詩文書部 特選 石下 珠光

鍊度の高い線質、計算されたか
のような空間構成、真綿のような
渴筆、重厚な潤筆がすばらしい。

◎現代詩文書部總評 高鍊度の作
が多数の中、目標が見えてこない
作も多数、次作に期待。(無極評)

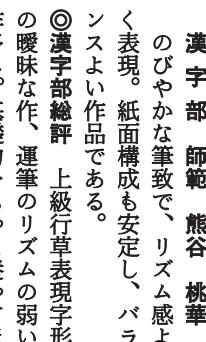


◎漢字条幅部 総評 初めて帛書に
触れた人や、さまざまの書体への挑
戦が見られた。初級は古典を学び
たい。



かな部 師範 岸田 東子
穏やかな墨色でゆったりとした
運筆が豊かさを感じさせます。老
練はモダンな世界を生みました。

◎かな部總評 字粒と紙面の調和
を欠く者多々研究を望む。上級者
は手本にとり込まれることなく、
独自の作へ向われたし。(明子評)



漢字部 師範 熊谷 桃華
のびやかな筆致で、リズム感よく
表現。紙面構成も安定し、バラ
ンスよい作品である。(大雲評)

今月の

特選 優秀作品研究別部 (特選)



56×172cm

臨書
(英峰)

佐藤桂香

「孔子廟堂碑」

従臣屬書東觀預聞前史若乃知幾其神
惟睿作聖玄妙之境希夷不測然則三五
迭興典墳斯著神功聖跡可得言焉自肇
立書契初分爻象委衷垂拱之風革夏翦
商之業雖復質文殊致進讓罕同

佐藤桂香臨

漢字
(大雲)

江本興舟

「七言二句」

◆超濃墨の筆触の味を楽しみながら
書いている雰囲気。横展開の字組み
に詩文書の風情を見る。(洋子評)

◆重厚な筆致は日頃の鍛錬から生ま
れ出るものか。現代性、明るさが作
品に響きを与える。(元信評)

◆息使いを感じさせてくれる運筆見
事。ここぞと思う所に濃墨を筆の動
きから生じたかすれ素晴らしい。

(倫子評)

江本興舟書

◆柔毛筆を用いて、温雅な渴線に趣
きがある。後半三行に変化が加わ
れば、一層の魅力が増したかも。

(萬城評)



172×56cm

現代詩文書
(八戸)

市川紫泉

「俵万智の歌」

◆短歌を小字と大字の構成にして書
き変化に溢れた作品。大字の荒々し
い渴筆と全体の構成が良い。

◆歌人と書き手の呼吸が行き交い海
峡の表情を書作品としてうまく定着
させている。やや下が重いか。

(萬城評)

(元信評)

市川紫泉書

◆歌の景色を想わせる展開で、弾ん
だ息が伝わってくる。濃墨に白がま
ぶしく輝く。落款の位置は一考。

(洋子評)

◆線に息づかいを感じ、津軽の荒波
が目に浮ぶ激しさを一層作品を引き
しめている。最後の峠が一考。

(倫子評)

◆心の落ち着いた運筆、波法に
さまざまな表現が見られるのに
もう一工夫をしたらもっと素晴
らしい。

(倫子評)
(萬城評)

◆温和で品性の高い古典である
ために臨書する人の心境が作品
に表われてくる。心と技の調和
が大事。

◆端整で穏和な書風が丁寧に広
がる。全体観は充実した筆致と
思うが、穏やかさが弱く見えた
りも…。

(洋子評)
(元信評)

◆おだやかで品格高い書風をよ
く捉えて作品にまとめている。
造形にやや難があるところが氣
になる。

(元信評)

現代詩文書

(手葉)

大内熒軒

「天空に…」



70×135cm

大内熒軒書

- ◆白を利かせ、トボけた味が個性的。飄々としながらも線質に骨氣がみなぎり、空間を広げる。(洋子評)
- ◆大胆な構成に惹かれる。直線と曲線、潤滑の変化が奇妙な風情を作り出した。(萬城評)
- ◆大きな世界、正に天、紙面から力強く声をかけられる感がすばらしい。このリズムを忘れないで。(倫子評)

(元信評)

- ◆墨の流れをとらえて形が造られた面白さ。始筆の動きが少々考えたか。墨の量が多くなった。(倫子評)
- ◆スピード感と洒落た構成が一際目を引く。余白を存分に生かした渴筆書さらに充実を。(洋子評)

(洋子評)

- ◆不思議な構成に新鮮さを感じる。大きな展がりと厚みを支える伸びやかな線は厳しく又明るい。(元信評)
- ◆上部の潤筆による回転運動と、下部の渴筆による軽快な動きの対比が絶妙。印の大きさと位置も見事。(萬城評)

(萬城評)

漢字 (森地)

東平絹子

「魏武帝短歌行」



172×56cm

東平絹子書

◆日頃の学書を十二分に活かし多字数作品にうまくまとめた。自らの持ち味の線で落ち着いた充実作。(元信評)

◆近代的な雰囲気を持った表現で古い昔の姿の中にいきいきとした動きが表現されていて素晴らしい。(倫子評)

◆隸書の書法を着実に修得し、その上で深味のある渋い線を作り出し成功している。安定感ある作品。(萬城評)

◆作品として見応えのある隸書となつた。凜々とした線にシャープなリズムが宿り、独自の趣を醸す。(洋子評)

前衛書 (四谷)
角田悠香
「砂時計」



135×70cm

角田悠香書

◆不思議な構成に新鮮さを感じる。大きな展がりと厚みを支える伸びやかな線は厳しく又明るい。(元信評)

◆上部の潤筆による回転運動と、下部の渴筆による軽快な動きの対比が絶妙。印の大きさと位置も見事。(萬城評)

(隸書の部)
「漢字」
大雲 奥田 嵩柏
龍泉 小林 洋龍
千葉 竹浪 叙舟
安波 鈴木 英晴
「かな」
「かな」

総出品点数
82点

創作の部(51点)	漢字 - 15点	かな - 1点
前衛の部(31点)	篆刻 - 1点	現代詩 - 19点
臨書の部(29点)	漢字 - 15点	かな - 1点
篆刻の部(2点)	漢字 - 1点	前衛 - 15点
かな - 2点	漢字 - 29点	創作の部(31点)

漢字研究部
(孔子廟堂碑)

選評 小浜 大明

今月のホープ作品



阿 部 邑 里

◎漢字研究部総評
全般に法帖をよく見て書かれていましたが、
孔子廟堂碑の特徴である接点を離して余白
を残し穩健な姿勢を示している点や、右払い
を思い切って長く払って暢達に表現している
点等、法帖をよく観察して書かれた立派な臨
書です。起筆に力が入りすぎたのは残念です。

九成宮のような転折の用筆や、向勢ではなく
背勢に書かれた作品も少なくありませんでした。
この碑は古くから、沈着にして悠遠、ゆ
とりある温雅な楷として高く評価されてきま
した。形だけではなく、呼吸を抑えた息の長
い運筆で、伸びのある書線が表現できるよう
学書して下さい。又、各々の文字によって転
折の書き方が微妙に異なるなどの、細部にも
気を配って下さい。



和良良白皓 真智子
美重子景泉子

箕稔隆佐山翠
和 城子扇子房徑

麗純紀希祥彩
流平夫美華華

信幸光初桂嵩
代平彩江香柏

かな研究部
(高野切第二種)

選評 庄司紅邨

今月のホープ作品



可祥洋

蓉炎春

宏由
起つ
子え枝

律昌喜
子子代

内田皓泉

◎かな研究部総評

平安前期の古筆が持つ品位をよく表現出来ています。連綿する時の斜線が緊張感を持続し見事です。墨量の使い方も適切で、澄明な線質を醸しています。

一見すると平明に見える、高野切古筆ですが、決してそうではありません。漫然と臨書するのではなく、筆、字形、墨、連綿を把握する能力を養って下さい。

かな研究部成績表

				かな研究部	特選	内田	皓泉
東久有こう高秀 総賀秋だる恵秀	紅大高生正大秀竹玉千澄A泉澄秀小竹澄顛や正やA秀石 瑤雲崎大華雲水扇松葉春I会春明汀扇春綠ま華まI明習	鈴堀松北木磯門河橋神深生田岩岩永山宇志齋永山藤大内 木切浦又原貝脇岡本谷堀方野瀬崎瀬村田水藤井口村森田 川由か	特選				
薄岩石五飯新阿 田潤川十高井部 美	智幸玉春輝清信星紅雲清美可祥洋蓉炎春起つ宏律昌喜皓 泉江暎子羅子扇霞卿洗子三園子汀秀華春え枝子子代						
春祥洋佳幹知雅 緑苑子榮生枝悠	こ東明東華調若前椿上洞東五泉や有竜う玉枝八 竜京枝東英東N大伏樁筑椿 こだ実漢伯祥布葉橋翠泉書向葉会ま秋泉の松阪街 泉橋苑小峰向H雲華翠桜翠だ						
吉吉吉山山武松別平瀬濱畠都辻田武高進塩佐佐後近小小吉菅川河小岡大遠梅 野田田本崎藤倉府山田田山丸 玉山橋藤澤藤々藤藤沼藤野田合熊田西藤原 千	彩真鶴真桜蕙侑信つ陽竹芝ど洋哲芳雅寿美香町良知松初さ彩静温和代十珙虹 祥理子紀江睦子子一雪香子子子紅苑華泉子春風ゑ兩代子敬子夜美楽祥						
も高陵 入	坪京竹硯澄 高澄蓮京泉湘澄千遊千翠玉 澄正澄千硯了湘昌澄千玄幕彩 和橋美水春 井春紅橋会南春葉雲葉柳松 春鼎華春葉水か南苑春葉象張	こ誉玉彩 こ田松	こ高澄高た前澄彩 こだ井月真か前松	八戸戸	安仙台	華岩沼波台	佳作
青會 木木	若吉横宮宮三松增本堀北古深平西戸近田高高未神新波柴猿佐坂齋河木北岸加小小大櫻江梅梅 菜田山澤内嶋田田田川條郡澤山澤池中橋野棟保行谷 渡藤巻藤野下村田藤野川嶋石田山津井野藤川垣崎部海	内	内	元	元	元	佳作
啓勇 子介	矩佑蘭草喜敏代華美魯靖美佳彩博柳耶幸杏直佳満愛翠冬詠麗翠惠都惠東翠理彩信星と茂久代 子舟秋平子子秀雪春子子月華峰舟芳衣苑華子子華泉華子苑香子子舟子陽給香子祥子夫子弘香子子泉鳳子汀翠						60書
正生英春高八蒼三大樹翠蒼椿大調た大蘭大若昌生千大生蓮 広福艸如大童華大明春昭土誠う千和石正A八生 正 華大峰汀崎街原廉阪原吟陽翠阪布か雲鼎雲葉苑大字阪大紅 島山玄月阪泉祥阪漢微氣和る葉平習華I街大	正 大千椿八秀 阪葉翠街歎						
佐佐佐酒斎齋後近込小小河高小黒工木君北岸菊菊川川亀金加大小小冲字臼今猪井大伊伊石石石生池飯安足浅 藤藤藤々井藤田藤藤藤林林林野武板柳藤元島川本池本本岐井子岡藤藤野澤 野井谷閑又上飼藤藤渡橋ひ	佐						知
麻桂和恵桂綾祥喜淑閑蕙晃萩雅啓玄く竹山桃春 萩善玉南紫綾紫蘆荻龍雅萩和華綾悠心理英道英寿翠さ知津萩光代実君 美實香子子子子萩子窓子代江子城ら葉房苑翠祥西高蓮汀仙美風城美惠芳光子子泉乃花華扇二石子子子子花溪彩子枝子							美
遷阪苑陸原光川泉雲汀翠葉習葉張葉阪華徑谷曜陵秋水阪ま橋街張吟せ翠阪岐陵草玄舟阪水雲水南光陵阪月原汀漢生雲陽か習 外	大昌北樹春玉竜大春椿五石千幕大正書百木高有秀大や前八幕翠は椿大高一紳石大秀遊秀湘春高大香樹春明八八昆た石 遷阪苑陸原光川泉雲汀翠葉習葉張葉阪華徑谷曜陵秋水阪ま橋街張吟せ翠阪岐陵草玄舟阪水雲水南光陵阪月原汀漢生雲陽か習						
名波田佐口知田下 氏名羅裕十一	吉吉遊山谷森森宮三真松松松松前本堀福福廣平春林林長橋橋根丹中内富富德寺田高高鈴庄下嶺七穴猿佐 谷谷本本本羽村澤藤田澤永澤丸喜川 美理						加与惠
名擎翠四一美龍祥津裕ケ愛藍翠翠白律幸谷幸法キ歌美勝深玉千久日都雅惠一雅古萩惠悟貞久章 香咏代称美裕和董 玉綾子子子子博泉枝子ミ石華舟景鈴子子惠泉子子子子幸和美翠峰子和子子子琴子塘彩子仙子子子治校生紳子子子美子右子							